徳島大学総合科学部　人間科学研究
第7巻（1999）67－78

障害者スポーツを共有する身体の風景

佐 藤 充 宏*

A Perspective of the Communicating Body Theory in Sports for Persons with Disabilities.

Mitsuhiro SATO

Abstract

Nowadays the importance of sports for creative leisure and health has been increasing, and participation in sports has come to be regarded as a fundamental human right for well-being. In spite of this movement, there are still a lot of problem with participation in sports for persons with disabilities.

The purpose of this paper is to investigate problems of the community-based sports for persons with disabilities in terms of the communicating body theory. The results were summarized as follows:

1) Instead of doing the research from the point of view of the disabled body, we must changed the view into the exercised body in the disabled sports and recreation, The new view into the exercised body communication, and make the disabled players thinking positively, who had been STIGMATIZED(Goffman, 1963).
2) The exercised body dissolves the boundary between one's body and the other's, and the bodies of the disabled person and the field of sports from a harmonious whole, when they have common experience in the disabled sports and recreation.

Keywords: disabled sports and recreation, communicating body, body exercise
キーワード：障害者スポーツ、コミュニケーション的身体、身体運動

---

*徳島大学総合科学部人間社会学科スポーツ社会学研究室

1.はじめに

一般に障害者スポーツとは、その発生形態の違いから医療スポーツ、市民スポーツ、競技スポーツの３つの領域に分けられる。[3] しかし、この分類方法は制度によって位置づけられたサービスを提供する側の視点であって、当事者である障害のある生活者の視点から見定めたものではない。スポーツがより身近な文化として発展するためには、それぞれの独自の領域で行われてきた障害者スポーツを反省し、障害のある人を中心にすえて生活全体を見直す必要がある。そして、リハビリテーション・スポーツから生涯スポーツにわたるまで共通したスポーツ環境としてとらえ、地域の社会的支援体制づくりをすすめることが重要な今日的課題と考える。まさに、このことはノーマライゼーションという世界的流れの中で、障害や人間、発達の見方や価値観が変わりつつあり、障害のある人が生まれ育ったところで、共に生きていこうとするインクルージョンという過程において発生してきた問題である。また、障害者スポーツの問題を照射することは、それを抱える地域スポーツのあり方そのものを問い直し、再構成していくことができると考える。「障害からスポーツを考える、また、スポーツから障害を考える」という姿勢は、スポーツ社会学における障害者スポーツ研究の重要な視点であろう。

佐藤（1998）は、車椅子生活者の事例研究から「障害者スポーツ」と「生涯スポーツ」を捉え直す中で、スポーツと障害者の問題に対して身体運動の文化という包括概念を操作して関係性を示した。この研究で問題となったのは、従来の生涯スポーツ論では障害者スポーツを十分に捉えることができないということであった。[14] 障害者スポーツの視座を検討するには、医療、福祉、教育といった制度で培われてきた観点を、スポーツという文化資源の側から捉えることができるのかを検討しておく必要がある。障害者スポーツは、医療を中心として認められてきた。特に、社会リハビリテーションの分野では、スポーツは個人の余暇生活における社会生活力（Social Functioning Ability）として、その概念を広げつつある。[1] これに対して、障害者スポーツに対するスポーツ社会学の立場からのライフスタイル問題や障害を持つ身体とスポーツの論議はほとんど進んでいないのが現状である。

そこで本研究では、障害のある人のスポーツにおける身体のとらえ方とプレイの捉え方に焦点を絞ることで、そこに引き起こされる「場」の意義を明らかにしていきたい。そのため障害のある身体の問題、障害者スポーツの問題、スポーツをする身体とプレイとの関係を検討することで、障害者スポーツの場面における身体運動によるコミュニケーションの重要性を考察することが目的である。

2．障害のある身体の考え方：ICIDH モデルの改訂問題から

身体に障害があることについては様々な論議がある。障害者スポーツをする身体を考える前に、障害のある身体について、スポーツ社会学における身体論を外観しながら説明したい。そこで、WHO の国際障害分類のモデルが 2000 年に改変することに着目し、身体論の視点から障害のある身体を捉えてみようと試みた。

一般的にリハビリテーション分野で指標とされているのは、世界保健機構（WHO）の International Classification of Impairment, Disabilities, and Handicaps(ICIDH) Model（1980）であ

る[21]。この指標に対して、それぞれのレベルにおける身体を身体論の立場から読みとってみたものが図1である。

機能障害（impairment）	＝	生理的身体レベル	心理的、生物的、解剖的な構造又は機能の喪失又は異常
↓			
能力障害（disability）	＝	運動する身体レベル	人間として正常と見なされる方法や範囲で活動していく能力の限界
↓			
社会的不利（handicap）	＝	社会的身体レベル	その個人の不利益で、正常な役割を果たすことの制限

図1　WHOの障害の捉え方と身体レベルの関係

機能障害（impairment）レベルで焦点化している身体とは、治療対象としての「生理的身体＝もの」という捉え方である。これは、物理的身体、生理的身体、肉体と呼ばれる側面を示している。例えば、事故によって器官である脊髄神経が切れた現象は脊髄損傷という障害名がつく。そのために、本来動くべき下肢が自由には動かないという有機体レベルの身体組成や身体機能の視点から説明される障害をいう。

能力障害（disability）レベルで焦点化している身体とは、実際の目的に対して運動や活動を引き起こす「運動する身体＝はたらき」である。機能的障害をもつことで、一般に望ましい個体としての身体が、期待される運動や活動に対して「できない」ことが障害を持つこととして示される。要求される動作や運動ができないことは身体の能力がないことを示し、障害として位置づけられる。

社会的不利（handicap）レベルで焦点化している身体とは、社会生活における「社会的身体＝くらし」という捉え方である。機能障害や能力障害を持つことで付与された社会的価値の引き下げによって個人的役割を限定されていることを障害として捉えている。

このICIDHモデルに見られる対象としての身体は、個別的なものから社会的なものへと組み込まれながら、生理的身体→運動する身体→社会的身体という経緯で、各レベルにおける定位的な身体基準によって障害が決定されていると考えることができる。しかし、どのレベルのおいても、障害のある身体は対象物という枠組みに押し込められ否定的な意味合いの強いものとして捉えられていた。障害のある人は絶えず日常の社会の中にその身体を投じながら、その関係性のなかで障害者として存在してきたことになる。まさしく近代化されて目標とされた理想的身体の対極に「障害のある身体」を位置づけて秩序化してきたと考えられる。

これに対して、WHOは20年ぶりに障害の分類を変更するためにICIDH-2を検討している（図2）。主な改正点は、①障害の原因を疾病だけに限定していない、②それぞれの次元の名称が、中立的、肯定的表現に置き換えられている、③矢印が双方向になっている、④背景要因としての環境と個人の要因を重視していることがあげられる。[1] この改正では、社会的に障害の考え方が変化していることが窺える。すなわち、対象としての障害（外にある基

準）ではなく、自らの判断による障害（内にある不自由さ）という視点への転換である。

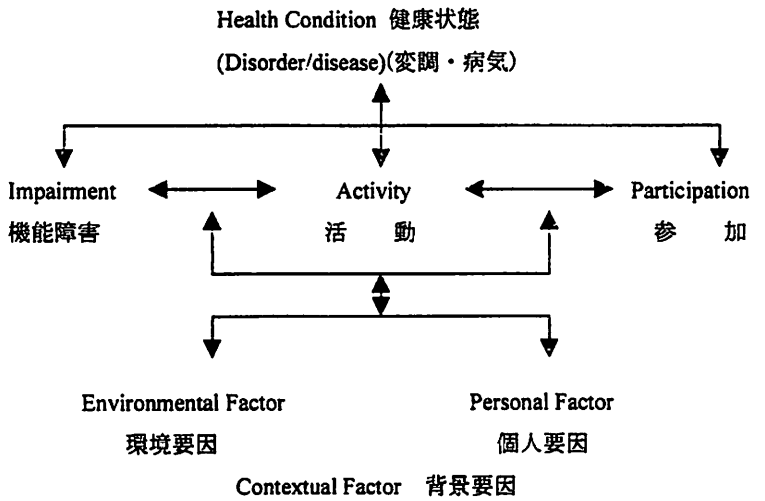

図２　WHO の国際障害分類―東京会議（1998 年）の ICIDH-2 モデル改正試案―[1)]

現象学的な身体論では「身体は社会的関係性を持つ」とされる。例えば、オニール（O'Neill, J. 1985）は社会生活に参加してくる身体を、一個の物理的対象としての生理的身体という側面に加えてコミュニケーション的身体という側面を示した。そして、その統合体として身体が存在していると読く。彼は、メルロ＝ポンティの説明を借用して個人と社会を繋ぐものが身体であることを説明する。つまりコミュニケーション的身体とは、身体が「見るもの」であるような「見えるもの」であるという性質に由来しているとされる。身体の把握には必ず鏡の現象（他者のまなざし）が必要となるのである。[11)]

障害の定義である ICIDH モデルから ICIDH-2 モデルへの変化は、この生理的身体からコミュニケーション的身体へという、障害を見る視点を身体の外から、身体の中へと移して来ている過程であると考えられる。例えば、障害者の記述が、障害者→障害を持つ人→障害のある人と変化してきていることからも窺えよう。

オニールは、われわれが始めて出会った他人に対してコミュニケーションを持とうとする場合、次のふたつの呪縛からは逃れられないとする。それは、①最初感覚を介して他人を評価する、②我々は社会の内にあって、他人の身体を己自身の鏡として探し求めるという呪縛である。この過程から、身体は外観の中に取り込まれることになる。そのため、具体的な外見の社会的構成を無視することはできないとするのである。[11)]

障害は社会的関係性をもつ。そのため、最初の外観からくる感情や心理的イメージは、その人に対する初期の評価や値踏みを行う。障害のある人の場合この鏡像（他者からのまなざし）に対する不安がある。手がない、足がない、言葉がしゃべれない、つまり、外観から読みとれる身体の違いは、お互いに注目し違和感を発生させ、お互いが違う身体を持つという結論に達してしまう。障害のある身体は、他者（常人）の身体を鏡像として受け止め難いの

である。しかし、外見からは見えにくい内臓疾患による障害などは、逆に現れにくいものになる。

障害のある身体を考える場合、その外観による呪縛性が強い。そのため生理的身体の特徴から障害という社会的スティグマ（STIGMA）を与えてきてしまった。ICIDH-2 モデルでも見られるように、障害の判断の基準点を自分の身体の中に移すことで、相互主観性のある障害（不自由さ）の問題が扱えるのではないかと考えられる。医療、福祉、教育という社会制度のなかで展開する障害者スポーツを、日常の生活世界に生きる身体に引き戻すためには、生きている身体に根ざしたところの間身体的コミュニケーションに注目し、障害者スポーツを捉え直す必要がある。

3．障害のある身体のためのスポーツ問題

リハビリテーション分野における障害者スポーツではスポーツとは自立に向けた一つの手段として捉えられてきた。この背景には精神に対する身体という心身二元論的な捉え方、すなわち近代化の象徴となる労働する身体を社会に位置づけてきたことが窺える。スポーツは身体の障害に対して一つの機能回復訓練の道具として採用されてきたといえるだろう。

障害のある身体のためのスポーツとはどのように位置づけられ捉えられてきたのだろうか。芝田（1994）は、「障害者スポーツに求められるのは「人間的平等」「障害の克服」「発達の保障」、であり、その効果は、身体的効果、精神的効果、社会性の向上が求められる」としている。そして「重度障害児者を含めて障害児者のスポーツを保障するために、スポーツという語を、「運動競技」と狭く理解するのではなく、「身体運動全般」と理解すべきで、そうしなければ、寝たきりの重度障害者には「スポーツ権」が存在しない」と指摘する。[16) 17)] この視点は、障害のある身体を社会化させるために、スポーツの文化性であるヒューマニズム、身体運動、余暇活動（遊び的活動）の機能に期待していると捉えることができる。しかし、障害の状態というのは、人それぞれで軽度から重度まで様々なレベルがある。例えば脳性麻痺である人のように、身体の障害と知的な障害を併せ持つ場合もある。このように個別性の高い障害の状態に対して、リハビリテーション・スポーツでは、障害のレベルに応じたセラピューティック・レクリエーションとして、あるいは身体活動トレーニングとして個人（クライアント）を対象にしてスポーツが取り入れられてきた。

ところが、例えば全国身体障害者スポーツ大会やゆうあいピックのように、その障害者観の延長上でスポーツを捉えてしまうと、同じレベルの障害のある人との競争を強いられてしまう。[18)] 障害の持つ個別性（多様性）が、競技スポーツの求める「結果における公平性（未確定性）」を確保するために、より細かな外観的障害基準によってスポーツをする身体が分類される。

このように障害のある身体のスポーツは、障害者として常人から分けられ、そして障害者の中でもその障害部位や障害の程度によってスポーツ活動のクラス化がなされ、そこに障害のある人の競争における平等性が保たれるのである。

4．プレイとスポーツをする身体の問題

（1）スポーツと身体の関係

社会学は人々の身体の科学性や生理学からではなく、人々の信念から生じてくる規則や規範的行動からの研究である。そのため、社会は私たちの精神の中に在るのであって、私たちの身体の内にあるのではないとされる。この問題を克服するためには、精神と身体という身体観をスポーツ社会学は乗り越えていかなければならない。

スポーツ社会学における身体を考える場合、文化としての身体論が参考になる。岡出（1994）はフンケ（Funke,1984）の概念を紹介して、身体の経験や身体を用いた経験、他人を介しての私の身体経験、私の身体を表現し他者の身体言語を解釈することを通して得られる経験などは、重要な文化としての身体（すなわち「からだ」）を理解することになる」と身体文化の体験の重要性を指摘する。[12] スポーツも文化の一形態として、私たちの生活に取り込まれるものである。この身体として存在する我々が、スポーツを文化として取り入れる場合には、その過程である身体運動に着目する必要がある。

瀧澤（1995）は、「精神と情緒を「こころ」、身体と肉体を「からだ」として備えた人間が身体運動を実践している」と捉えている。その上で、身体運動を対象化するために、「からだ」の身体にという側面を究明する必要性を唱える。すなわち身体運動は、身体と精神と肉体との関係性において成立する」ものであるとする。

瀧澤は、「運動ができる子どもは、主にからだを動かすことによって考えることができるとする。自らが動くことによって「からだ」で考えるのである。運動するために必要な「からだ」とは、筋力だけでなく、運動を作り出す「からだ」が必要である。動きとしてのからだが必要である。そのからだを理解するためには、肉体と身体を分類する必要がある。これは「からだ」の二側面として存在している。肉体とは「からだ」を科学で扱う場合に生ずる側面、身体とは、運動主体として「からだ」の働きに眼を向けたときに生ずる側面である」とする。[19] 彼の主張する運動を作り出す「からだ」に注目すれば、障害のある人という外から枠組みに当てはめてしまう研究視点を、からだを動かす主体という動的側面からの視点に転換することが可能であると考えられる。身体運動の主体は私そのものである。スポーツ運動学では、身体運動によって自分の身体を取り込んでいく過程（身体知の獲得）こそ、教育的意義があるとされる。

しかし、スポーツという文化は、教育制度の中で、その一つの性質を特化させることで価値を見いだしてきた。それが、スポーツにおける身体を「to have：持つこと」である。[8] 理想的身体として、「丈夫でたくましく、何でも上手に動かせる健康な身体を持つこと」が求められてきた。「スポーツができる身体」が外的規範として確立されればされるほど、その身体から距離を感じる子どもは、スポーツ嫌いになっていった。

障害のある人にとっても、スポーツは同様の問題を投げかける。障害のある身体を対象化させて、医療や福祉、教育のスポーツを行おうとすると理想的身体が現れてくる。このジレンマから脱却するためには、「障害のある身体」から「身体運動をする『からだ』」という視点の転換が必要になる。自らが「スポーツができるからだ」を探しだして、育てていくことである。自分のからだを確かめてみること、自分のからだを使ったスポーツの楽しみを仲間

と共有することが原点として位置づけられる必要がある。つまり、からだとスポーツが共に「to be:あること」（生きること）を大切にすることである。この次元における、運動主体としての「できる『からだ』」は、障害者スポーツを身体運動の論理から説明しようとする場合、重要な視点となろう。

近代化する障害者スポーツに対して、スポーツ社会学者の批判は多い。そこに、医療対象の身体と、競技スポーツ対象の身体が、同じ近代化の過程の中で外界に存在する理想的身体として「できるからだ」を求めていることにあった。しかし、それは近代化された社会に存在する障害者にとって身体を資本にして自立に向けたライフスタイルを確立するためには避けて通れない問題である。外的基準として創出される「できるからだ」を獲得することは、現実の生活では生活を安定させ、生きる自信へと繋げていく。この問題の本質は「できること」が、どのように位置づけられているかということではなかろうか。「できる」現象を外的基準として個人の欲求レベルからかけ離れたところにある問題として一方向から取り上げるのではなく、身体運動を通した現実と理想の身体間におけるコミュニケーション上に現れる「できる」問題として捉えてみれば、その意味内容が変化するのである。

本研究で主張するスポーツと共にある「からだ」を原風景として捉えようする視点は、社会制度によって展開する障害者スポーツの意義を反省するための批判的視点である。この考えは、芝田のいうスポーツの概念領域を広げる「身体運動全般」という概念と同様に、スポーツによるコミュニケーション的身体を描き出そうとしているものである。

（2）スポーツにおける身体を融解する力としてのプレイ

そこで、スポーツにおけるプレイと身体の問題について明らかにしておきたい。松田（1997）は、「人間は＜身体＞としてしか存在しない」という立場から、スポーツとの関係を考えることが重要であると指摘する。＜身体＞を、まさに他者と自己が出会う場所、人は自身の「身体」にこそ、常に他者と自己を抱えていると定義している。彼は大澤（1995）の身体論にある遠心化作用と求心化作用を例にあげて、その両義性こそが、実は他者との共存と、遊戯的関係（あいまいさ）を必要不可欠の条件とするプレイ性に、面白さの実質を与えているとする。つまり、スポーツと身体の関係は、身体のもつ社会性と両義性という性質が、プレイの他者性と遊戯関係に結びついているとする。スポーツをする身体は、プレイ・エレメントによって身体を遠心化―求心化させ、そこに現れる社会的身体が他者との共存関係に位置づけられると考えることができる。その主体は身体運動としての主体である。

ならば障害者スポーツにおけるプレイの重要性は、どこに焦点を絞っていけばよいのだろうか。八十川（1999）は重度知的障害者のスポーツを事例に、近代スポーツの条件である平等性の原理を受け入れることで勝敗に価値を置きすぎる弊害を指摘している。その中で、カイヨワのプレイ論を引用し、スポーツにおけるアレアの重要性に注目している。平等性の原理を受け入れるなら、アゴンよりもアレアを、平等性の原則に従わず成立するものとしてミミクリー、イリンクスの重要性を示している。知的障害者の場合、その身体活動や社会的身体認知レベルの状況から、平等性の原理を前提としないスポーツも、同等に重要な価値があることを提言している。[23] 確かに、プレイの中でも、イリンクスやミミクリーのような

エレメントほど、身体的な遊びの本質的なものとされる。例えば、エリス（Ellis,1973）は「覚醒一追求としての遊び」に理論的モデルを求めている。[4] このモデルは、人間的行動の自発性や自主性を肯定するもので、インクルージョンを目指す障害者スポーツにおける指導的意義は見いだすことができる。

現象としての障害者スポーツの「場」を考える場合には、カイヨワ（Caillois,1967）の言う「パイディアからルドゥスへ」という視点が重要であろう。「パイディアという初期段階の遊びでは名前付けのできない秩序のあらわれない状態から、約束、技術、道具などが使われ始めると特徴をもった遊びが出現する。これらのあそびが制度的存在と結びつくことで、規則とは切り離せないものになり、規則は遊びの本質の一部になる。この段階から、故意に作り出され恣意的に限定された困難、つまり、それをやり遂げたからと言って、解決し得たという内面的満足以外のいかなる利益をももたらさないような困難を解決して味わう楽しみが遊びの中に登場してくる。この原動力となるのがルドゥスである。ルドゥスはパイディアの補足であり、しつけ役となり、豊かにしようとするものである。」[3] 障害者のスポーツ・レクリエーションが、医療におけるリハビリテーションとして、また社会福祉における援助技術として、養護学校の養護訓練（トレーニング）として受け入れられてきた背景には、このパイディアからルドゥスに移行する人間本来のプレイの原動力に頼るところがあったに違いない。しかも、その行為は身体運動を伴っていたからである。

障害者スポーツの場面は、現象的には身体運動を伴ったプレイ性の側面を多く持っている。パラリンピックのような完成された競技ではアゴンであるという特性を示すことができるが、地域レベルで行われる医療、福祉、地域スポーツ団体の障害者スポーツにおいては、未完成なスポーツ活動としてルドゥス性が色濃く残っている。そのため、スポーツだからアゴンであるとは限定できない。アレアやミミクリなども存在するのである。障害の重さによる運動の不自由さや、身体運動に関わる経験の少なさから、他人（指導者、介助者）のまねをしたり、偶然に自分のプレイができたりする。そのできる感覚やあわせようとする感覚が、スポーツのもつ肯定的なイメージを広げていくきっかけとなっている。プレイという身体運動から派生する様々な身体感覚により、そのプレイ感情を鮮明なものに意味づけることができる。ここで重要な視点は、主体としての身体運動＝プレイを行い、主観的な体験様式で知覚しているという事実である。障害のある身体部位よりも、スポーツによって動き、動かされる身体が、未分化されず渾然一体となって自らの「からだ」を感じることである。

プレイの要素は、身体運動における遠心化と求心化の作用から、「からだ」という境界線を曖昧なものにし、「面白い」という感情を伝え合うことができる。プレイする身体は障害を持つ一持たないというレベルの差異の認識から解放され、この身体に対して主観的な意味や感情をつけて知覚する傾向が見られる。障害者スポーツは、この作用によって、障害のある一障害のないという外観的身体の認知を曖昧にし、スポーツに関わろうとする身体運動やその感覚、またその表現（反応）としてのしぐさ、笑顔、擬態語・擬音語によって渾然一体となったプレイ感情を共有しようとすることが、障害者スポーツにおけるプレイと身体の特徴である。

5.障害者スポーツを共有する場の重要性：スポーツと共にある風景

障害者スポーツの場面では、自己（障害のあるプレイヤー）と他者（指導者、介助者、家族）との関係は、プレイヤーの身体運動あるいは他者の身体運動によって引き起こされるリズムによって身体と身体、すなわち自一他の境界線は溶解し、一つの共同体を生み出す。例えば、知的障害のある人がボウリングをするとき、コーチが側で投球動作を示しながら一緒に身体運動を行っている場面を考えてみよう。本来、ボウリングをしている主体は知的障害のある人であるが、彼を指導するコーチの身体運動は、知的障害のある人の身体運動と深い関わりを持つようになる。お互いがストライクを取ろうというシンボルを持ち、お互いが相手の身体運動と合わせようと準備しているのである。できたりできなかったりの繰り返しから、できることへの快感は、個人的な感情から他者への読みとり能力によって同じ快感へのリズムへと広がっていく。

このような関係でできる場を、岡崎（1995）は「交流の共同体」として説明する。「交流の共同体は、内奥の共同性にその本質をもっている。内奥の共同性とは、理性あるいは認識によって分断、分割された非連続的存在としての個々人が、溶解体験に見られるような外界への全体的な再参加、没入を通して、連続的な存在として深い主観（内奥）から深い主観へ、あたかも笑いや涙が伝染するように、波動が通い合っていく、そのような傾向を共有することである。それゆえ、このような共同体は、まったく全体的にとしかいえないような状況で、異質な深い主観同士が交流し合う点に特徴をづけられ、切り離された個々人の部分的な同質性でもある日常的秩序を解体するという志向をもつことになる。」[13]

スポーツ・レクリエーションは、障害者スポーツで集う人たちの身体運動を通して「からだ」と対話する場であり、他者に向かって自己表現できる大切な社会的コミュニケーションの機会にもなっている。松田は「溶解体験としての交流が実現するのは、人々が志向に振る舞うその瞬間であって、それは、社会関係として持続的なものとしては存在しない。それゆえに、本来的な他者関係のすべてと、そこに生まれる共同体は、社会的な次元ではなく、体験の次元のみに存在することになる」とする。障害のある、ないに関わらず、その場に参加する人の身体体験レベルで起こるスポーツという身体運動体験こそが、障害者スポーツにおける原点である。そこでは関わりを持つ他者（医師、指導者、介助者、付添人等）が存在し、彼らもまた、障害者スポーツの参加者であり、その空間を構成しているのである。スポーツは世界や他者との感覚的な対話としての一体感を経験するための様々な機会を与えている。スポーツをする体感性は、スポーツの世界に完全に投入され、無意識的で肯定的な個人感情を育み、スポーツのある風景に同化していくのである。

6.まとめ

ブリンドとタウ（Blinde & Taub, 1999）は障害のある人が、個人的に獲得できる知識やスキルを発達させる機会が少ないためにエンパワーメントの欠如状態にあることを指摘し、スポーツやフィットネス活動に参加することで、社会人としての能力の育成や、生活における自立を促進させたことを報告している。[2] このように、障害者スポーツはレベルの差はあれ、身体的、精神的、社会的な身体を再認識させる機会になっていることが分かる。

今回の試論は、このような障害者スポーツにおける身体運動の問題をそのコミュニケーション性に求め、その中に「できる」からだのシーンの重要性を指摘することであった。しかし、現実の障害のある人のスポーツ場面では、スポーツの持つ平等性や競争性の原理によって、障害のある人々の身体的特徴によってより分離され差異化されていた。障害者スポーツが競技化され高度化することはプロパガンダとして社会的価値の引き上げが行われることに繋がる。しかし同時に、障害者スポーツは近代化されてきた競技スポーツと同じように、競争原理や平等性の原理を前提にしたクラス別記録主義や勝利至上主義の問題を抱え込んでいかなければならなかった。

そこで本研究では、スポーツ社会学における障害者スポーツ研究を捉える場合、「障害のある身体」という見方から、「身体運動のできる身体を持つ」という視点への転換が重要であることを指摘した。このような視点を原風景として捉えることで、現代社会に組み込まれて発展する医療、福祉、教育の障害者スポーツを反省し、私たちの生活の身近なところで行われるべき生活スポーツの概念として組み込むことができるのではないかと考える。

生活をベースに障害のある人のスポーツを考える場合、身体運動によるコミュニケーションの場に参加する重要性を示唆することができた。その理論的な特徴を示すと次のようになる。

①スポーツをする身体の曖昧さ＝プレイによる自一他の境界の融解

スポーツの持つプレイ性は、相互の身体運動によるコミュニケーションによって、自分と他者（同じプレイヤー、指導者、介助者）との自一他の身体境界を融解する。表出するモノローグとしてプレイそのものに注意が向けられる。このとき身体は、自他の境界を融解し、拡張された身体のモノローグとしてプレイが成立している。そして、活動が終了してそのシーンを振り返るとき、ダイアローグの中で身体が収縮する。これは、障害を持つ一持たないという制度から規定された身体の次元を曖昧にし、スポーツが求める「できるからだ」を体験することになる。

②身体運動場面の共有による感情の創出＝身体リズムや快の感情の共有

基本的に身体運動は身体によってコントロールされる個人的なものである。しかし、これを読みとりながらスポーツ活動が成立する。自分の動作と相手の動作のリズムを合わせていく。お互いが、相手の動作を事前に読みとりを行い、身体運動の空間を共有しようとする。この身体運動の向けられることは、例えば、卓球がラケットに当たること、卓球のラリーが続くことなのである。その目標が達成できることは、「できた」という感情を共有し、お互いがフローの状態を得、反省的に満足感を得ることができる。

このように障害者スポーツは、引き起こされる＜場＞を重視することである。そこにはスポーツをする身体の拡張一収縮という曖昧さによる拡大体験、お互いの身体運動による融解体験を共有し、肯定的感情を引き起こすことが重要である。この視点が、障害のある人のスポーツを行う上での原風景として存在し、これは医療化された身体や、競技化された身体という対立概念を矯正しうるものとなる。

そのうえ、ありふれた日常生活の風景として息づくスポーツのあり方を再考することにも向けることができるのである。

引用参考文献

1) 赤塚光子、石渡和美、大塚庸次、奥野英子、佐々木葉子（1998）社会生活力プログラム・マニュアル、中央法規

2) Blinde, E.& Taub, D. (1999). Personal Empowerment through Sport and Physical Fitness Activity: Perspectives from Male College Students with Physical and Sensory Disabilities. Journal of sport behavior, 22(2), 181-202.

3) Caillois, R. (1967). Les Jeux et les Hommes, edition revue et augmentee. Gallimard. (ロジェ・カイヨワ、遊びと人間、講談社文庫)

4) Ellis. M. J. (1973). Why people play, Prentice-hall, Inc. （エリス（1991）人間はなぜ遊ぶか、黎明書房)

5)初山泰弘（1997）障害者スポーツ、総合リハビリテーション研究、25巻9号、pp817-822

6)伊藤良子（1998）障害児と健常児における遊びとコミュニケーションの発達、風間書房

7)鯨岡峻（1998）関係がかわるとき、泰野・やまだ編、コミュニケーションという謎、ミネルバ書房、pp173-200

8)舛本直文（1994)「からだ」の教育の視点、学校体育、1994年3月号、pp24-26

9)松田恵示（1997）身体性とプレイ・スポーツ、松田・松田・島崎・坪田編、スポーツ文化と教育、学術図書出版、pp47-59

10)松田恵示（1997）スポーツのファン体験と共同体の身体性―中間集団としてのスポーツファン、杉本編「スポーツファンの社会学」、世界思想社、pp192-210

11)宮地秀行・田川豪太・伊藤利之（1997）スポーツ・レクリエーション、総合リハビリテーション研究、第25巻12号、pp1345-1350

12)岡出美則（1994）新しい「からだ」の教育、学校体育、1994年3月号、pp27-29

13)岡崎宏樹（1995）交流の共同体と合一の共同体―バタイユとジラールの供犠論の比較から、ソシオロジ、39(3)

14) O'Neill, J. (1985). Five Bodies: the human shape of modern society. Cornell University Press. (ジョン・オニール（1992）語りあう身体、紀伊国屋書店)

15) Peterson,C.A.& Gunn,S.L.(1984).Therapeutic Recreation Program Design:Principles and Procedures. Prentice Hall,inc. (キャロル A.ピーターソン・スカウト L.ガン（1996）障害者・高齢者のレクリエーション活動、学苑社)

16) Roesener,Hans-Joachim(1989).Community-based Sports for Disabled People to Ensure the Success of Rehabilitation.

17) 佐藤充宏（1998）車椅子生活者における「障害者スポーツ」と「生涯スポーツ」、徳島大学総合科学部人間科学研究第6巻、pp43-61

18) Schilder, P.(1987)身体の心理学、稲永和豊監修・秋本辰雄・秋山俊夫編訳、星和書店

19) 芝田徳造（1992）障害者とスポーツ：スポーツの大衆化とノーマリゼーション、文理閣

20) 芝田徳造（1995）日本の障害者スポーツの過去・現在・未来、成安造形大学研究紀要「鳥」第2巻、pp111-125

21) 高橋豪仁・佐藤充宏（1995）身体障害者のスポーツに関する調査研究、徳島文理大学研究

紀要、第49号、pp.47-61
22) 瀧澤文夫（1994）運動のできる「からだ」、学校体育、1994年3月号、pp24-26
23) 瀧澤文夫（1995）身体の論理、不昧堂出版
24) Van Der Gugten, G.W.(1997) Sport as a Tool in Rehabilitating Persons with Physical Disabilities. ICHPER・SD Journal,33(4),50-55.
25) やまだようこ（1998）身のことばとしての指さし、泰野・やまだ編、コミュニケーションという謎、ミネルバ書房、pp3-31
26) 八十川睦子（1999）知的障害者のスポーツに関する一考察：主として指導者の立場から、第5回西日本スポーツ社会学研究会資料
27)米山岳廣（1997）知的障害者の文化活動、文化書房博文社

（1999年9月14日受付，1999年9月30日受理）